

## 2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

### A. コースワークの充実・強化

#### ⑥その他

##### ●神戸大学人間発達環境学研究科

##### 「正課外活動の充実による大学院教育の実質化」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

正課外活動のメニューを提示し、院生の参加を呼びかけたものの、多くの院生は正課の専門教育カリキュラムまたは指導に拘束されており、まったく参加できない院生も存在した。参加する院生に偏りがあった点は否めない。

(苦労したこと、困難であったこと具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

専門によっては院生の正課カリキュラムは非常にタイトであり、正課外活動に参加するゆとりのない院生もあった。しかし、もっとも大きな要因は、院生を指導する教員の意識にある。本研究科は、既存のアカデミックフィールドを超えて新しい融合的研究を創成することが期待されている。しかし、なおも、教員の側に、そうした融合領域における新しい研究の創成に後ろ向きな人たちが存在する。その結果、正課外活動への関心はあるものの実際には参加できない院生や、正課外活動への関心を表にあらわせない院生などの存在が確認されることとなった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

教授会やFD研修会などで、本取組の実験性について理解を求める活動や、各専門コースの代表者による推進協議会を設営した。しかし、実践と研究を一体化させたり、他の領域と研究活動を協働で実施したりするような新しい学術推進の方法はあまり理解されなかった。その結果、元々活動と研究をつなげている院生の活動がより活発になるという効果のみが残った。正課外と正課の連結の意義や領域連関の意味を、仮説の一部としてでもモデル化し、教員に納得してもらいやすい形で提示すべきであった。